



こーひーぶれいく

コロナ禍、散歩で再発見

佐治 英郎

Saji Hideo

コロナ禍の中、家で過ごす時間が長くなったこともあって、以前から気になっていた体重の増加が加速され始めた。「これはいけない」と思っていたところ、コロナ禍での運動不足解消やストレス発散の手法として散歩が注目を集めているとの記事を読んだ。そこで、これまで特に趣味も持っていなかったこともあり、週末には少し時間をかけて自宅周辺を散歩することにした。住んでいるのは京都市内の伏見という所で、近くの丘陵（桃山丘陵）の中の伏見桃山御陵や伏見桃山城に向かう木々に囲まれた散歩道を歩いていると、普段電車や車、自転車で通っているとあまり気づかなかった鶯の鳴き声や梅・桜・タンポポの花、燕の飛ぶ姿や木々の新緑の若葉、シオカラトンボの飛ぶ姿やセミの鳴き声、コオロギの音色やススキの穂、イチョウの黄葉やモミジの紅葉、サザンカの花等に、それぞれ春、初夏、夏、秋、晩秋、冬の訪れを感じる等、草花や鳥、昆虫等の変化を通して季節の変化を身近に感じることができる。

また、伏見の街中を歩くと歴史を身近に感じ、その街の特徴にも直に触れることができる。前述した桃山丘陵には、豊臣秀吉によって築城された伏見城があったとのことで、この地が桃山時代の中心となっていたのだと思うと桃山時代を身近に感じる（現在ある伏見桃山城は、戦国時代の京の景観を描いた洛中洛外図にある伏見城を参考に1964年に造られたもので、豊臣秀吉によって築城された伏見城とは場所も少し違うとのことである）。また、街中を散歩していると安土桃山時代の有名な大名の名前が入っている町名を示す看板をよく見かけるが、これは恐らくその場所に当該の大名の武家屋敷があったものと思われて興味がわく。

また、伏見といえば灘と共に日本を代表する日本酒の酒処として知られていて、実際、街中を歩いて

いると多くの蔵元があり、大きな酒蔵がいくつも立ち並んでいる姿は壮観であり、それが不思議に伏見の街にはよく調和している。「名水あるところに名酒あり」といわれるように、酒造りと水は密接な関係があると言われている。伏見はかつて「伏水」（“ふしみ”と読む）と記されていたように、昔から良質の地下水に恵まれていて、豊臣秀吉が伏見城内の井戸水で茶会を催したという逸話が残るほどである。現在でも伏見の各蔵元は、この地下水を利用して酒造りをしている。また、この良質な水が湧き出る井戸として、現在も「伏見七つ井」と呼ばれる井戸が伏見区内に残されている。その1つである石井（いわい）は伏見の氏神である御香宮神社の境内にあり、環境省が選定した「日本名水百選」の第1号に選ばれた御香水と呼ばれる素晴らしい水が湧き出ており、毎日絶え間なく地元の人達がボトルを持参して水を汲みに通っている。また、御香宮神社の表門西側には、「酒は飲め飲め飲むならば 日の本一のこの槍を 飲みとる程に飲むならば これぞまことの黒田武士」と唄われる「黒田節」がこの伏見で誕生したという駒札が建てられている。この駒札の説明文によると、文禄5（1596）年正月に、伏見城下町の大名・福島正則の屋敷で開かれた酒宴で、黒田家の家臣が福島正則から「これを飲めば望みの品を与える」と大きな鉢に注いだ酒を勧められた時、その家臣は、豊臣秀吉から正則に贈られたという秘蔵の品である座上の槍を指し、「あれをいただけるなら」と酒を飲み干し、見事に槍をものにしたとのことで、この話が歌詞の元となって歌い継がれて民謡となり、「黒田節」として広く知られるようになったということである。京都の伏見が福岡民謡「黒田節」誕生の地として銘記されているのは意外であったが、酒どころ伏見にふさわしい逸話と思う。

伏見のお酒は、比較的低温での発酵、もろみの末期に四段仕込みを行うことにより京料理に寄り添う、おだやかでソフトな風味が醸し出されるとのことである。コロナが終息し、機会があれば、地元の伏見酒を味わいながら伏見を散策するのも楽しみ方の1つかと思う。

（京都大学学術研究支援室）